

## 第10話 日清戦争

朝鮮の独立を脅かす理不尽な清国に対する我が国の義憤から日清戦争が起こる。  
陸に海に連戦連勝、ついに東洋の老大国を屈服させて和を請わせる。  
下関条約の締結。

### 清国の条約無視

明治18年4月、日清両国の間に結んだ天津条約で、我が国が朝鮮において清国と全く同一の権利を得たことは、すでに述べてもおいた通りです。しかし清国は、その後も条約の明文を無視して、朝鮮をまるで属国かの如くに取り扱い、ひそかに事大党を助けて威を振るっていた。

ところが、我が国は、そのころ、内に在っては官制の改革、憲法の制定、議会開設の準備、法典の編纂などの事があり、外に対しては条約改正の大問題があった上に、やがて議会が開かれてからは、政府と議会との間にたびたび衝突が繰り返されたりしていたので、朝鮮に於ける清国の行動に一々抗議をしていくことができなかった。

### 袁世凱の暗躍

清国の朝鮮駐在官袁世凱は、これを知っていよいよ喜んだ。彼はこの機会にこそ、ますます自国の朝鮮に対する勢力を伸ばそうと考えた。そこで、朝鮮政府を動かして、しきりに我が国の勢力を朝鮮半島から駆逐しようとした。明治22年9月、威鏡道の監司(長官)趙秉式が防穀令を発して、日本へ米穀の輸出を禁じて、すでにこれを買入れおいた我が商人に夥しい損害を蒙らせたのも、又、27年3月、刺客を放って、我が国に亡命していた独立党の首領金玉均を巧みに騙して上海に連れ出させて、そこで彼を殺させたのも、袁世凱が裏から糸を操っていたのだと言われる。

この金玉均の暗殺事件が大いに我が国民を憤慨させて、中には清国に対する復讐を叫ぶ者すらあった折に、たまたま起こったのが朝鮮における東学党の乱です。

### 東学党の乱

東学とは、西教即ち西洋のキリスト教に相対する呼称で、朝鮮の儒者の間に起こった教えです。この頭領は、全瑛準という者でしたが、明治27年3月に、全羅道古阜郡の人々がその郡守の暴政に苦しんで乱を起こすと、すなわち推されてその指揮者になったので、これを東学党の乱と言ったのです。この徒党の主張は、悪吏を除いて弊政の改革を図るというに有ったが、一旦彼等が起つや否や、忽ち、慶尚道や忠清道の方面にも、同志が之に応じて起つ者が多く、その勢いが頗る盛んでした。

朝鮮政府は大いに驚き、直ちに兵を發して鎮定に向わせたが、却って賊軍に破られた。

この時、わが国では、政府と議会との軋轢がいよいよ甚だしく、第五議会が解散されて、その臨時

総選挙で当選して成立したばかりの第六議会も、またもや解散されたところでした。

清国の朝鮮駐在官 袁世凱は、これを見、それを考えて、日本は今、とても他国に兵を出すことなどは出来まいから、清国の勢力を朝鮮に確立するには今が最も好い機会であると思ったのです。そこで朝鮮政府に勧め、清国に援兵を乞わせる事にした。

日清両国の出兵

清国はすぐにこれに応じて、明治27年6月4日、直隸提督 葉志超に1,600の兵を授け、威海衛から海路を牙山に急行させて、その7日に、天津条約に基づいてこの旨を我れに通知して来た。ところが、それには属国を保護する為の出兵であるということが書かれていたので、我が国ではすぐにそれに対して、朝鮮への出兵は承知したが、我が国は未だ曾て朝鮮を清国の属国とは認めたことが無いということとを明らかに言い送ると共に、こちらにもまた居留民を保護するために軍隊を朝鮮に派遣する旨を清国政府に通告した。

そして、折から帰国していた朝鮮駐在公使 大島圭介を軍艦八重山に乗って急ぎ京城(今のソウル)に帰任させ、つづいて陸軍少将 大島義昌に混成旅団を率いて仁川に向わせた。

こうして6月12日には、我が陸兵1,500が京城に入り、その後、ひきつづいて、混成旅団の後続隊が仁川および京城に配置された。

ところが一方で東学党は、この時にはすでに日清両国の出兵に恐れをなして四散してしまったので、その乱はおのづから鎮まった。

日清両国の交渉

そこで、我が国は清国に対して、この際、両国が共同して朝鮮の弊政を改め、ながく東洋の平和を保つことにしようと交渉した。すると、清国はこれに応じないのみならず、却って我れに対して撤兵を要求して来た。「朝鮮の弊政の改革は、朝鮮に自ら行わせればよい。清国さえその内政には関与しないのに、況して日本は朝鮮の独立を認めているのであるから、猶更その内政に干渉する権利はなからう。それよりも、内乱がすでに鎮定したのであるから、日本は早く朝鮮から撤兵するがよい」というのがその趣意でした。

そこで、6月22日に我が政府はこれに対して、「朝鮮は我が隣国で、種々の利害関係が深く且つ重大であるから、内乱、暴動などの絶えないのを空しく傍観しておくわけには行かない。今日、これを救う方法を講じないでおくのは、啻に隣国の友誼に悖るのみならず、また実に我が国の自衛の道にもそむくわけである。それゆえ、我が政府はよしんば貴国政府のお考えとはちがっても、将来に朝鮮の安寧が保たれて政治が正しく行われる見込みが立たない間は、断じて我が軍隊を撤退することは出来ない」と清国政府に通告する一方、独力をもって朝鮮の内政改革を断行させる決心をして、直ちに大島公使に改革案を朝鮮政府に提出させた。

朝鮮政府も、やがて、次第に我が誠意に感じて、改革実行の意を明らかにするに至ったが、すると、清国は頻りにこれを妨害して、大兵を朝鮮に送って我れを威圧しようとしたり、或いは朝鮮政府を威嚇し

## 第10話 日清戦争

て我が勸告を退けさせようとしたのみならず、駐清露国公使に頼んで、我が国に、清国と共にその兵を撤退して、平和に事を解決するようにと勧めさせたりした。

折から、アメリカ、イギリスの両国からも、我れに対して、事を平和に解決するようにと勸告して来た。

### 日清国交の断絶

もとより、我が国は好んで平和を破ろうとするものではないので、清国が若し我れと共同して朝鮮の改革を言うならば、我れはいつでもその提議に応じるつもりであった。又、その旨を清国にも答えておいたが、清国は、我に撤兵を求めながら、自分はずますます大兵を送るなどして、少しも誠意を示さなかった。仲裁に入った英国の駐清公使も、ついにはその不信を憤って手を引いてしまうに至った。

そこで、7月14日、我が政府は清国政府に向って、「清国政府に平和の解決を望む誠意が無いために、こういう状態になったのであるから、将来どんな事が起ころうとも日本政府はその責に應じない」という事を通告し、いよいよ朝鮮政府に向って、改革の実行を厳重に催促することにした。

ところが、朝鮮政府は依然として清国の威嚇におびえて、その態度を明らかにしなかったので、7月23日、大鳥公使は兵を率いて、入って朝鮮王宮を衝り、国王（高宗）に謁して、朝鮮政府の反復が常でない事と日本政府の誠意とを奏上した。すると国王は深く日本の好意を謝し、内政改革の実行を誓われた上に、そのころ久しく閑居していた父の大院君を起こして、事に当たさせた。

翌24日、大院君は先づ閣臣の更迭を断行して、これまで悪政を施していた閔族一派の者を処罰して、25日、朝鮮の独立と矛盾する清国との諸条約を廃棄することを宣言し、更に牙山に駐屯している清国兵を退けることを我れに依頼した。

こうして、外交上の折衝をしている間に、我が陸海軍はそれぞれ用意を整え、一旦開戦ともなれば直に相手を撃滅しようと準備して待っていた。

### 豊島沖の海戦

たまたま7月25日の朝早く、我が第一遊撃隊の司令官海軍少将坪井航三が、吉野、秋津州、浪速の3艦を率いて朝鮮近海を警戒しながら豊島沖に差しかかると、凶らずも清国の軍艦濟遠、広乙の2隻が来るのに出会った。日清両国の間には未だ宣戦の布告はなかったので、我が司令官は彼れに対して、平生の通りに敬意を表した。ところが濟遠は何を思っか、いきなり砲撃を以ってこれに答えたので、我が艦隊はすぐに応戦して、ここに初めて砲火が交えられた。

### 高陞号の撃沈

こうして激戦一時間の後、濟遠は大損害を受けて遠く威海衛に遁れ、広乙は浅瀬に乗り上げて火を發したが、その折から、清国の軍艦操江が陸兵をのせた運送船高陞号を護送して来るのを我れは発見したので、更に進んでこれに迫ると、操江は忽ち白旗を掲げて降った。高陞号は、もとイギリスの汽船を清国政府が雇ったものでしたが、我れ(訳注：浪速の艦長は東郷平八郎大佐)がこれを捕獲しようとする

## 第10話 日清戦争

と、船長のイギリス人はすべて我が命令に従おうとした。

にも拘わらず、乗り組みの清将卒らが肯かなかったので、ついに我れは船長および船員らに難を避けさせた後に、これを撃沈した。清の将卒1,100名は船と共に沈んだ。これを豊島沖の海戦という。実に日清戦争の端緒でした。

### 成歎駅の戦

一方、我が陸軍は、この日、朝鮮政府の依頼によって、牙山の清兵を駆逐するために龍山の本営を出発して、28日に京城を離れること約60kmの素砂場に達した。ところが、清兵は、この時すでに素砂場の南約6kmのところにいる成歎駅の丘陵地に堅固な陣地を構えて我が軍の来るのを待っていた。これは牙山の地が防守に不便なことを悟って、その東北方約24kmの成歎駅に兵を進めたのです。この地は前に安城川を控え、水田や沼澤などの相連なった、守るに易く、攻めるに難しいところです。

我が軍は、すなわち兵を2隊に分けて、1隊(右翼隊)は陸軍中佐武田秀山がこれを率いて、安城渡から成歎駅の前面に向かい、1隊(左翼隊)は大島少将がこれを率いて敵の背後を衝くことにした。左翼隊は夜半の12時に素砂場を出発して、右翼隊は1時間遅れて29日の午前2時に出発した。

最初に敵と衝突したのは右翼隊のほうでした。安城川付近の村落に近づいたころは、まだ夜は暗かったが、忽ち前方村落の民家から、我れに向って敵の猛然と射撃するのに出会ったのです。すなわち我れはこれに応戦して、交戦およそ半時間の後には、いさましく突撃を試みて敵兵を追い払ったが、この時、先登を進んだ中隊長陸軍大尉松崎直臣は、惜しいかな敵の2弾を受けて戦死しました。又、かの有名な喇叭手木口小平が、突撃喇叭を吹きながら敵弾に中って斃れ、斃れても後もなお握り締めた喇叭を口に当てたまま、微かにその音を吹き続けたというのもこの時のことです。

さて、29日の未明に、成歎駅の東北の高地に達した我が左翼隊は、夜が明け放れるや否や、敵の右翼の第一堡壘を目がけて攻撃を開始した。そのころ、わが右翼隊もまた進んで成歎駅の全面に達したので、敵の左翼の第五堡壘に迫って行った。砲声、銃声がさかんに起こって、やがて敵の勢いがひるむと見ると、忽ち我が兵は猛然と銃剣を揃えて突撃した。

### 宣戦の大詔が下る

こうして交戦2時間余の後、我が左右両翼隊は第1、第2、第5、第4と順々に敵の堡壘を陥れて、遂に最後の第3堡壘は両面からこれを猛撃した。敵は支えきれなくなって、忽ち逃げ去った。時に午前7時半ころで、成歎の敵の陣地はここに全く我が軍の有に帰したのです。大島少将はすぐに1隊の兵を牙山に進めて将兵を追わせたが、逃げ足の早い彼等はすでに遠く遁れてしまっ、もはや一兵も残ってはいなかった。この役におけるわが軍の死傷は80余名でしたが、敵の死傷者は500を下らなかったと言われる。

大島少将は翌30日、一旦牙山に赴き、その翌31日、そこを発して、8月5日、わが官民の歓呼のうち、京城に凱旋した。

すでにこうして両国の和親が全く破れた以上は、もはや宣戦を中外に布告し、彼れの亡状を懲らしめて以って和平を謀る外に途が無かった。すなわち 8 月 1 日に、明治天皇は以下の大詔を下された。

天佑を保全して、万世一系の皇祖を踐む大日本帝国皇帝は、忠実勇武なる汝有衆に示す。

朕は、茲に清国に対して戦いを宣す。朕の百僚有司は宜しく朕の意を体し、陸上に、海面に、清国に対して交戦の事に従い、以って国家の目的を達するに努力せよ。

苟も国際法に反さない範囲で各々権能に応じて、いっさいの手段を尽くして必ず遺漏のないことを期せよ。

惟うに朕が即位して以来茲に 20 有余年、文明の化を平和の地に求め、事を外国に構えるのが極めて不利な事を信じて、有司には常に友邦の誼を篤くする努力をさせた。幸いに列国との交際は年を遂って親密を加えた。しかしなぜであろう、清国が朝鮮事件に於いて我れに対して着々隣交に戻って、信義を失う挙に出るとは。

朝鮮は、我が帝国がその始めに啓誘して、列国の伍伴につかさせた独立の一国である。しかし清国は毎に自ら朝鮮を以って属邦と称して、陰に陽にその内政に干渉して、その内乱があるに於いて口を属邦の拯難に藉き、兵を朝鮮に出した。

朕は明治 15 年の条約に依り、兵を出して變に備えさせ、更に朝鮮が禍乱を永遠に免れ、治安も将来に保たせて、以って東洋全局の平和を維持せんと欲す。

先づ清国に告げて、協同して事に従おうとした。しかし清国は翻て種々の辞柄を設けて之を拒んだ。帝国はここに於いて朝鮮に勸めた、その秕政を蠶革して、内は治安の基を堅くして、外は独立国の権義を全うすることを。

朝鮮は既に之を肯諾したが、清国は終始陰に居て百方その目的を妨害し、剩え辞を左右に托して、時機を緩にして、以ってその水陸の兵備を整えた。一旦その整備が成ると、直にその力を以ってその欲望を達せんとして、更に大兵を韓土に派し、我艦を韓海に要撃して、殆ど亡状を極めた。

即ち清国の計図は、明らかに朝鮮国が治安の責任をとる事を無くさせて、我が帝国が率先して諸独立国の列に伍させた朝鮮の地位は、之を表示する条約と共に、之を蒙晦に付して、以って帝国の権利益を損傷し、東洋の平和を永く担保しない事にあると疑わざるを得ない。

熟々その為す所に就いて、深くその謀計の存するところを揣ると、清国は実に始めから平和を犠牲にしてその非望を遂げんとしていると謂わざるを得ない。事既に茲に至る。

朕は平和と相終始して、帝国の光栄を中外に宣揚す事に専らなりと雖も、又公に戦を宣せざるを得ない。汝有衆の忠実勇武に倚頼し、速やかに平和を永遠に克復して、以って帝国の光栄を全うする事を期す。

## 第10話 日清戦争

この詔勅を受けて国民はみな感奮勇躍、大いに国威を輝かさんことを期した。殊には従軍を欲して義勇兵を願い出た者も多かったが、詔が下り、臣民は各々その常業を励むようにと言われた。

国を思う道にふたつはなかりけり　いくさのにはに立つも立たぬも

という明治天皇の御製は、この時のご威懐であると拝承する。

### 清国皇帝の宣戦詔勅

この日、清国の皇帝もまた宣戦の詔勅を出した。これは、我が詔勅が極めて温和な語調で平和が破れざるを得なかったわけを事理明白に述べているのに反して、冒頭から先づ、「朝鮮は我が大清の藩屏たること200余年、歳に職貢を修める事は中外が共に知る所たり」と飽くまでも朝鮮が清の属邦であることを主張している。そしてその朝鮮に、日本が故なくして兵を出し、兵を撤去させようとしても肯かないのみならず、朝鮮政府に迫って国政を改革させようとしている云々と、口を極めて日本の行動を非難していた。即ち、わが国の態度の公明正大なのに対して、彼れはついに理不尽の主張を棄てずに、どこまでもその非望を遂げようとしたのです。

宣戦の布告の前後に、東京駐在の清国公使は帰国の途に就き、北京駐在の我が代理公使小村寿太郎および清国の各地に駐在していた我が領事も皆その任地を引揚げた。こうして、日清両国はいよいよ正式に砲火の間に相まみゆる事となったのです。

これに対して列国は局外中立を宣言した。

8月26日、我が国は更に朝鮮との間に攻守同盟を結んだ。「日本国へ清国に対する攻守の戦争を任じて、朝鮮国は日本兵の進退およびその食料準備のために、及ぶだけの便宜を与える」ということを互いに誓約したのです。

### 清兵の進出

さて、豊島沖の海戦、成歎駅の陸戦以後は、京城以南にまた清兵の影も無くなったが、7月下旬の頃から、清国では北清の各地に駐屯していた陸兵を続々と朝鮮に入れて、北韓の要地である平壤（今のピョンヤン）に拠らせた。我が軍の北進を食い止めて、機会あらば南下して京城を経略しようとしたのです。成歎、牙山の敗兵もこれに合して、その総数は凡そ15,000と号せられた。葉志超、左寶貴、衛汝貴、馬玉崑、豊陸阿の5将がおのおのその部下を指揮していた。

### 我が軍の渡韓

そこで、わが国では第五師団および第三師団の一部をもって先づこれを攻撃させる事にした。第五師団の第九旅団は、すでに大島少将の率いる混成旅団の主要部として成歎駅の戦いに功を立てたが、今や同師団の残留部隊全部が、同師団長陸軍中將野津道貫に率いられて渡韓することになったのです。輸送は8月1日から4日にわたって、広島の宇品港を出発、釜山に上陸して京城に向った。野津中將は19日に京城に着いた。

一方、第三師団からは、先づその第18連隊が平壤の攻撃に参加することになり、剛勇をもって聞こえた連隊長陸軍大佐 佐藤 正 に率いられて、8月23日に豊橋を出発し、同月29日に海路を遠く元山に上陸した。

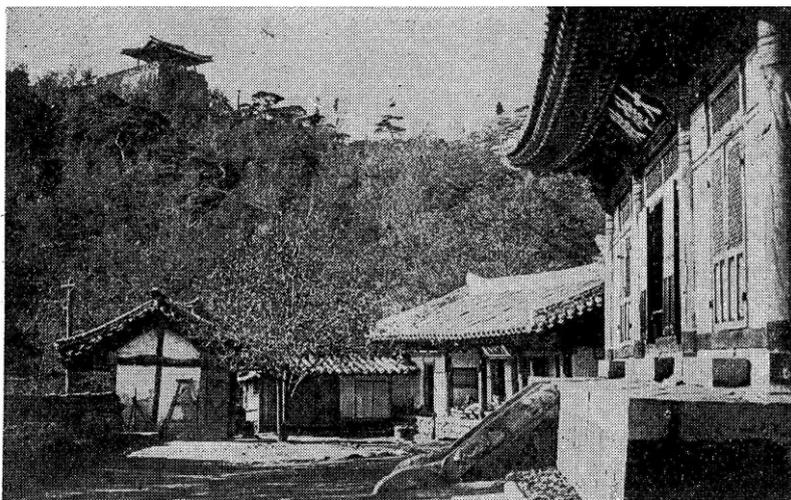
平城攻撃の部署

さて、野津中将は京城に在って、おもむろに清兵の動静をさぐりながら、平壤攻撃の策を立てていたが、いよいよ9月15日をもって、四方からこれを総攻撃することにした。即ち、大島少将の率いる混成旅団は京城から義州街道を進んで、平壤の正面に向かい、佐藤大佐の第18連隊は元山から西に進んで平壤の北面にまわり、第十旅団長陸軍少将 立見尚文の一隊は、京城から朔寧を経て西北に進み、北東方から平壤の側面を圧することとし、野津中将は自ら主力を率いて義州街道の黄州から左へ大同江の下流を渡って、平壤の西側に迫ることにした。

折りしも9月とはいえ、尚残暑の厳しいところであった上に、元山、朔寧の両支隊は、殆ど道のない山中を通ったりして非常な苦心をしたが、12日に早くも平壤の東方郊外に達した大島旅団が、13日から攻撃を開始して敵を牽制している間に、他の三面のわが軍も、それぞれ予定の進路を進んで、14日には何れも目的の地点に達した。この時、わが軍の総数は凡そ16,000でした。

玄武門を破る

こうして翌15日、朝早くから、わが軍は予定どおり一斉に包圍攻撃を始めた。平壤は、懸崖急坂な大同江に臨んだ丘陵地で、守るに易く攻めるに難いところであった上に、清の諸将も存外よく戦ったので、わが軍は奮戦力闘大いにつとめた。とりわけ最も苦戦したのは、前々日から攻撃をつづけていた大島旅団でしたが、ついにその一隊が大同江を渡って城の南面に迫った。

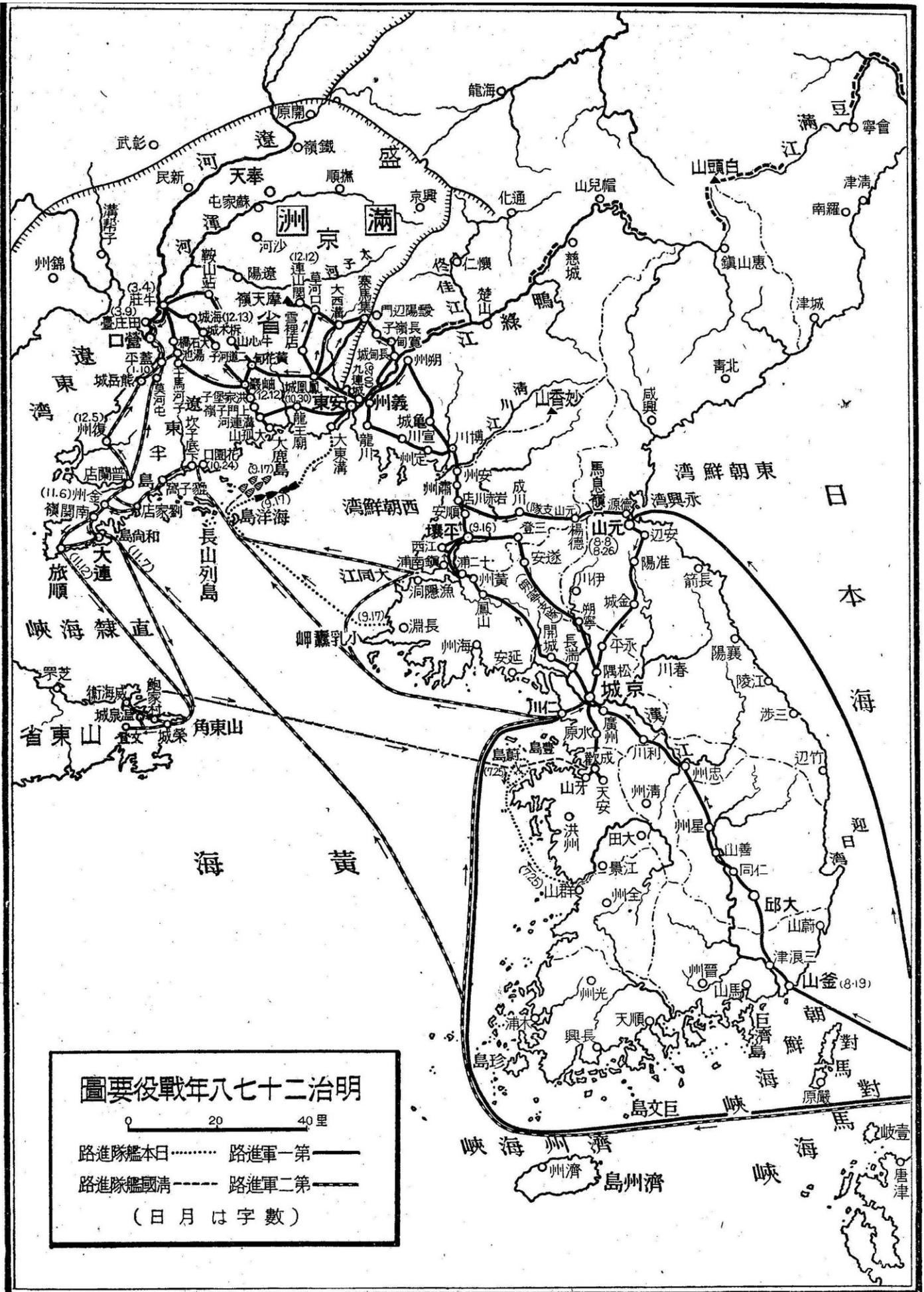


朝鮮 平城 左方に高く聳えてみえるのが乙密台

その頃、朔寧支隊は平壤第一の要害である背後の高地 牡丹台を占領し、元山支隊は箕子台の敵を撃ち払って牡丹台と乙密台との中間の凹地にある玄武門に肉薄した。有名な一等卒 原田重吉の玄武門破りは実にこの時のことです。

即ち、彼の属していた小隊は、指揮者の中尉 三村幾太郎以下16名でしたが、彼等は大胆にも、敵が扉を堅く鎖して守つ

ていた玄武門のそばの障害物乗り越えて門内に踊りこんで、そして、驚いた敵が一斉に猛射すると、急いで難を門の楼の上に避けた。その時、重吉は独りひそかに敵弾の中をくぐって楼を下り、手早く障害物を取り除いて、中から門の扉を明けたのです。



明治二十七八年戦役要図

0 20 40 里  
 路進隊艦本日..... 路進軍一第——  
 路進隊艦國清----- 路進軍二第——  
 (日月は字數)

玄武門は、これを入れれば直ちに乙密台の下に達します。それで、味方の軍勢は扉が明け放たれるや否や、一時にどっと門内になだれ入って、あわてふためく敵兵を追い払いながら乙密台へと迫って行った。

そのころ、平壤の西側に進んだ野津中将の主力軍もまた頻りに猛撃を加えて、勇ましく進んで来た200騎ばかりの満州兵を、忽ち皆殲滅した。

平壤の陥落

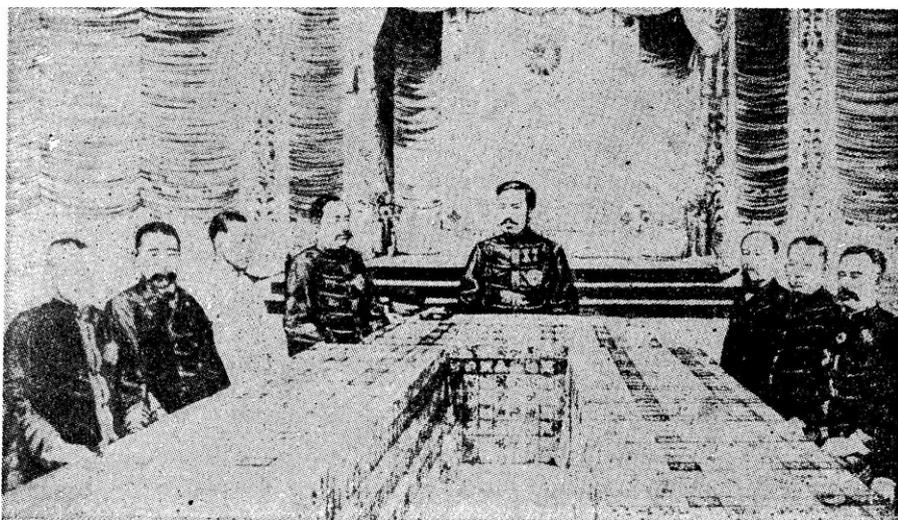
こうして平壤城内の敵の勢いは、わが軍の四面から迫った猛攻撃に次第に弱って来ていたが、やがて、諸将の中で最も声望の高い左實貴が、乙密台で我が元山支隊の流弾を胸に受けて戦死すると、忽ち将卒は意気喪失して、全く戦意を失った。総大将の葉志超は、すでに成歓でも敗れていたもので、日本軍には逆も敵になれない事を知っていたのであろう。ついに白旗をかかげて降を乞い、明朝に開城するとの旨を我が軍に通じて来た。しかし、実はこれは彼れの偽りで、敵の多くは夜にまぎれて義州方面に逃げた。

わが軍は翌16日の早朝、四方から入城して完全に平壤を占領した。城頭高く日章旗は朝風に翻った。

この役における我が軍の戦死者は将卒合わせて189名、負傷者は506名でしたが、敵の戦死者は凡そ2,000、負傷者は凡そ5,000と称せられた。捕虜は511名にのぼり、捕獲品は大砲40、小銃1,000余、弾薬、糧米、金銀貨その他の雑品は積んで山をなした。

広島の本営

これより先き、天皇は大本営を広島に進め、9月13日に宮城を出発されて、15日に着輦。広島城内の、これまで第五師団司令部の会議室だったところをご座所として、自ら軍事を統帥される事になった。



広島 広島大本営の御前会議

その翌16日に、早くも平壤占領の捷報が達したので、頗るご満足に思われ、下の勅語でその功を賞された。

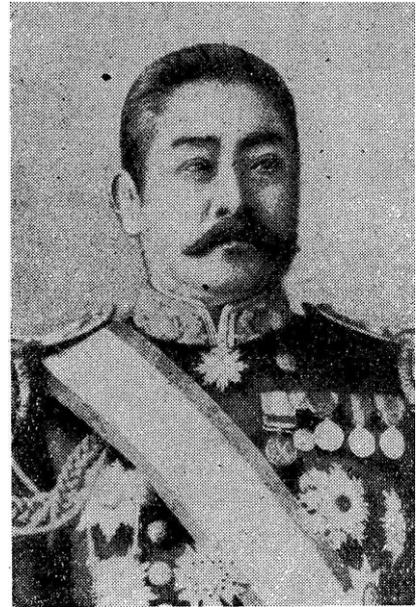
中央は明治天皇、右は奥から伊藤博文、大山巖、川上操六、左は奥から有栖川宮熾仁親王、山縣有朋、西郷従道、樺山資紀。

朕、大本営を進める初めに当り、我が軍大いに平壤に勝つるの報に接し、深く将校士卒の勤勞を察し、速やかに特異の功績を奏したのを嘉みとする。

全国民の感激は言うまでもなかった。上下一同歓呼して我が軍の成功を祝していると、ついでまた、わが海軍が敵の主力艦隊北洋水師と満州の大孤山沖に戦って大いに勝ったという一大快報が来た。黄海の戦いというのがこれで、今その戦況を略叙すると、以下です。

こうかい かいせん  
**黄海の海戦**

9月16日、即ち平壤陥落の日の午後5時ころ、わが連合艦隊司令長官海軍中將 伊東祐享は、本隊の松島、千代田、厳島、橋立、芙蓉、比叡の6隻、第一遊撃隊の吉野、高千穂、浪速、秋津州の4隻、および砲艦 赤城、巡洋艦代用の西京丸の2隻を率いて、朝鮮黄海道の西端である小乳トウ岬付近の錨地を發し、翌17日の早暁、黄海北部の海洋島の西をまわると、航路を北東に転じて、大狐山沖の大鹿島に向って行った。敵の主力艦隊を搜索する為です。西京丸には軍令部長海軍中將 樺山資紀が海戦視察のためにと乗っていた。



いとうゆうこう  
**伊東祐享**

午前11時半、先頭の吉野が遙かに東方の沖合に敵の艦隊を認めて、これを本隊の旗艦 松島に報じたので、すなわち我が艦隊は、十分に用意して進んで行くと、敵は清国北洋水師 丁汝昌の率いる北洋水師の定遠、鎮遠以下12隻の軍艦と数隻の水雷艇とでした。わが艦隊は単縦陣を作って進み、敵の艦隊はやや人字形をなした単横陣を作って進んで来た。その中央の字首には旗艦の定遠および鎮遠がいた。

こうして彼れと我れとが互いに進んで、零時50分、約6,000mの距離になると、敵の旗艦定遠が先づ我が先頭の吉野に向かって発砲した。つづいて他の敵艦も一斉に発砲した。しかし、我れは敢えてこれに応ぜず、ますます敵に近づいて、約3,000mという有力な着弾距離に達してから、はじめて一斉に砲門を開いた。時に零時55分でした。

戦いは次第にはげしくなっていた。敵の右翼の揚威、超勇の2艦は忽ち我が遊撃隊の猛射に遭って火災を起こした。わが艦隊はいよいよますます奮戦した。敵の艦隊も実によく戦った。こうして、彼れと我れの主力を集めた20有余の堅艦は、互いに一進一退、奮闘猛撃をつづけていたが、ついに敵の旗艦の定遠が、我が砲弾のために檣頭（帆柱の頭）を折られて、信号旗を掲げることが出来なくなった頃から、彼れの陣形は大いに乱れた。午後3時半にはすでに全く大勢が決した。

即ち、敵の超勇、致遠、経遠、揚威、広甲の5艦は撃沈され、定遠、来遠、平遠の3艦は火災を起し、鎮遠以下の諸艦もまた大損害を被って全く戦闘力を失ったのです。その死傷者は1000余名に及んだとも言われる。これに反して、我が艦隊は、旗艦松島の損害が最も甚だしく、比叡、赤城がこれに次ぎ、西京丸もしばしば危険な地位に陥ったが、しかも皆幸いに危難を脱して、一隻も失わず、死傷者も僅かに290名に止まったのです。

その日の暮れ方、敵は辛くも敗残の諸艦を収めて旅順港に逃げ帰ったが、すでに著しく勢力を減じてしまっていたので、これより黄海の制海権は完全に我が手に帰した。

天皇は、この捷報を聞かれて、9月23日に、下の勅語を出して連合艦隊の功を賞された。

朕は我連合艦隊が黄海に奮戦して、大捷を得たと聞き、その威力は已に敵海を制圧すると

覚える。深く将校下士卒の勤労を察して、茲に特殊の勲功を奏したのを嘉みとする。

ひろしま りんじぎかい  
**広島における臨時議会**

なお国内では、さきに第六議会在6月2日に解散されて、9月1日に総攻撃が行われたが、この時にはすでに日清戦争が起こっていたので、これまで事毎に政府と軋轢していた民党も、今は兄弟が牆に鬩ぐべき時ではないと、全くその態度を一変して、10月15日に広島に召集された臨時議会においては、政府が提出した臨時軍事費一億五千万円の予算案を満場一致でたちどころに可決した。ふだんはふだん、非常時には非常時の心得をもって日本国民の気持ちを最も反映したものとして、今日でも痛快に感じられる。

だいちぐん ぜんしん  
**第一軍の前進**

さて、征清方略に就いては、之より先き、9月1日に第五、第三の両師団をもって第一軍を組織することにして、陸軍大将山県有朋をその司令官に任じた。それで、9月25日、彼は平壤に着いて、全軍の部署を定め、立見少将の率いる第十旅団を先発隊として続々と義州に向わせた。



やまがたありとも  
**山県有朋**

ところが、さきに平壤に敗れた清国兵はこの時すでに義州を棄て、鴨緑江を渡り、新たに補充された兵士と共に、虎山、安東県、大東溝、九連城、大孤山、鳳凰城などの各地に拠っていたので、10月22日、山県司令官は野津第五師団長、桂(太郎)第三師団長らと共に義州に着くと、命を佐藤大佐に下して、24日、先づ義州の上流約12kmの水口鎮から鴨緑江を徒歩して虎山の敵の後方に出させ、25日の早朝、架橋工事の出来上がるのを待って、桂中将の率いる第三師団の主力を義州から渡ってその前面に向わせた。

虎山の敵は前後から我が軍の攻撃を受けると、それでも約1時間半ばかりは応戦したが、やがて陣形を乱して、九連城および鳳凰城方面に逃げ去った。我が軍は午前10時半頃、虎山を占領した。

そこで、山県司令官は野津中将と共にその日の午後1時過ぎに江を渡って、第一軍司令部を虎山付近の高地に置き、翌早暁を期して九連城を攻撃する手筈を定めた。

てきぐん はいそう  
**敵軍の敗走**

ところが、その後の第一軍は、さながら疾風の枯葉を巻くにも似ていた。第一に先づ、翌26日の未明に、我が軍は予定の通り、三方から進撃して九連城に迫って行ったが、この時、城中にはすでに一兵もいなかったもので、九連城は戦わずして我が軍の手に落ちた。同じくこの日、我が軍の一部隊は安東県に向ったのだが、そこにももう敵はいなかった。しかも敵の砂糖、毛皮製の防寒具、新式の連発銃などを沢山に遺棄して、我が軍の鹵獲に任じたのです。翌27日には大東溝を、29日には鳳凰城を、11月5日に

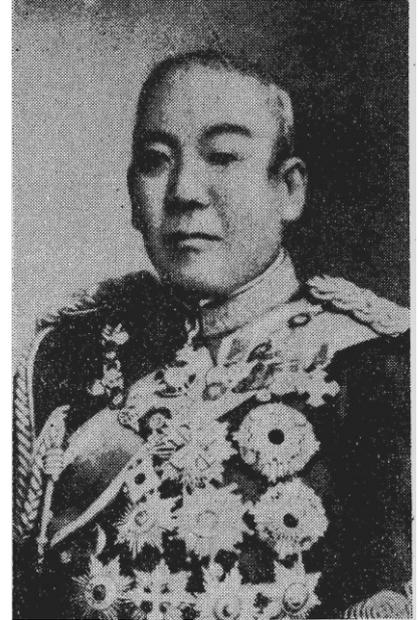
## 第10話 日清戦争

は大孤山<sup>せんにりょう</sup>を占領した。

これより先き、敵の総大将には敗将の葉志超<sup>ようしちょう か</sup>に代わって、智勇兼備<sup>ちゆうけんび</sup>と称<sup>しょう</sup>された老将<sup>ろうしやう</sup>の宋慶<sup>そうけい</sup>が任せられて、10月11日には九連城に着いていたが、成歆、平壤、虎山とつづいて惨敗した清兵は、到底、日本軍には敵<sup>てき</sup>することの出来ないのを知って、すなわち我が軍が進む<sup>い</sup>や否<sup>いな</sup>や、三十六計逃げる<sup>さんじゅうろっけいに</sup>に如かずと、全軍が先きを争って逃げ出すので、さすがの宋慶もこれを如何ともすることが出来なかったのだといわれる。

### 第二軍の花園口上陸

さて、第一軍がこうして着々と敵地を占領していた時に、第一師団と第六師団の一部である混成第十二旅団とでもって組織された我が第二軍は、その司令官陸軍大将<sup>おおやまいわお ひき</sup> 大山巖<sup>おほやまいわお</sup>に率いられて、10月24日、先頭部隊が遼東半島の花園口<sup>かえんこう</sup>に上陸<sup>じょうりく</sup>してから、敵兵の逃げる<sup>お</sup>のを追って次第に南下し、11月6日、第一師団長陸軍中将<sup>やま ちもとはる</sup> 山地元治<sup>やまもと げんじ</sup>は、僅かに約30分間の砲撃<sup>きんしゅうじやう</sup>で金州城<sup>おとし</sup>を陥<sup>おとし</sup>れ、その翌7日、第一旅団長陸軍少将<sup>の ぎまれすけ</sup> 乃木希典<sup>だいれん</sup>は戦わずして大連<sup>せんにりやう</sup>を占領した。



大山巖

### 旅順口の攻撃

こうして11月13日、陸軍少将<sup>はせがわよしみち</sup> 長谷川好道<sup>ひさがわ よしみち</sup>の率いる混成第十二旅団<sup>きんしゅう</sup>が金州<sup>やまじ</sup>に到着すると、山地第一師団長<sup>にしかんじろう</sup>は陸軍少将<sup>ぜんえい</sup> 西寛二郎<sup>みづからほんたい</sup>の率いる第二旅団<sup>ひき</sup>を前衛として、自ら本隊を率いてこれに次ぎ、長谷川少将<sup>こうえい</sup>の混成旅団<sup>じゅんじ</sup>を後衛として、17日から順次金州城<sup>りよじゅん</sup>を発して、旅順<sup>りよじゅん</sup>に向った。旅順<sup>りよじゅん</sup>は渤海の関門で、天然の要害<sup>りよじゅん ぼつかい</sup>に加えて、更に人工<sup>かんもん</sup>の限り<sup>てんねん</sup>をつくした要塞<sup>いすざん</sup>です。打ちめぐらすに、椅子山<sup>あんしざん</sup>、案子山<sup>しょうじゅざん</sup>、松樹山<sup>に</sup>、二龍山<sup>りゅうざん</sup>、東鷄冠山<sup>ひがしけいかんざん</sup>、黄金山<sup>おうごんざん</sup>、老虎山<sup>ろうこざん</sup>など、10余の砲台<sup>ほうだい</sup>をもっていた。

フランスの提督クールベエ<sup>ていとく</sup>がこれを見て、嘆賞<sup>たんしょう</sup>して、「50余隻の堅艦と100,000の銃兵とでもって海陸からこれを攻め、半年をかけなければ到底<sup>とうていおとし</sup> 陥<sup>おとし</sup>れることは出来まい」と言ったといわれるほどで、所謂<sup>いわゆる</sup>難攻不落<sup>なんこうふらく</sup>の金城鉄壁<sup>きんじやうてつぺき</sup>と敵の誇<sup>ほこ</sup>っていたところでした。敵将<sup>きやうしやう</sup> 龔照瓊<sup>こうしょう</sup>が14,000の兵をもってこれを守っていた。

### 旅順口の陥落

途々<sup>みちみち</sup>、迎え撃つ敵<sup>むか</sup>を撃退<sup>う</sup>しながら、次第<sup>げきたい</sup>に旅順<sup>しだい</sup>に向って進行した我が軍は、11月20日、その背面<sup>はいめん</sup>の防衛<sup>ぼうぎやう</sup>線<sup>せん</sup>に近い要地<sup>ようち</sup>を占領<sup>せんじやう</sup>して、翌21日の早暁<sup>そうぎやう</sup>から、連合艦隊<sup>きやうどう</sup>と協同<sup>きやうどう</sup>して海陸一斉<sup>きやうどう</sup>に総攻撃<sup>そうこうげき</sup>を開始した。砲声<sup>ほうせい</sup>殷々<sup>いんいん</sup>、敵もしばらく応戦<sup>おうせん</sup>したが、まもなく椅子山<sup>いすざん</sup>、案子山<sup>あんしざん</sup>、松樹山<sup>しょうじゅざん</sup>、二龍山<sup>にりゅうざん</sup>、東鷄冠山<sup>ひがしけいかんざん</sup>の諸砲台<sup>しよほうだい</sup>が次々に陥落<sup>かんらく</sup>すると、その余の諸砲台<sup>しよほうだい</sup>も守備兵<sup>しゅびへい</sup>は、忽ち風<sup>ふう</sup>を望<sup>のぞ</sup>んで敗走<sup>はいそう</sup>した。

午後2時頃には我が軍は早くも旅順<sup>しがい</sup>の市街<sup>しがい</sup>を占領<sup>せんじやう</sup>し、午後4時半ごろには、港口<sup>こうこう</sup>に近い黄金山<sup>おうごんざん</sup>砲台<sup>ほうだい</sup>をも占領した。実に彼れ<sup>なんこうふらく</sup>に取<sup>ちゆうゆう</sup>つての難攻不落<sup>むそう</sup>も、わが忠勇無双<sup>ちゆうゆう</sup>の将卒<sup>しやうそく</sup>にとっては、あまりにも脆<sup>もろ</sup>い要害<sup>ようがい</sup>だ

## 第10話 日清戦争

ったのです。 僅かに1日にも足らぬ戦鬪で旅順は完全に我が軍の手に帰した。

なお、この役における我が軍の死傷者は200に満たなかったが、敵の死者は2,500人を下らなかったといわれる。 総大将の 龔 照 瓊は逸早く海路を取って芝罘に遁走したということです。

### 第一軍の行動

さて、一方、第一軍は鳳凰城、大孤山を占領した後、更に軍を西に進めて、11月18日には岫巖を占領した。 たまたま司令官 山 県 大 将 は、病にかかって帰朝を命ぜられた為に、野津中将が代わって司令官に補され、第五師団長には陸軍中将 奥 保 強 が補せられた。 こうして軍はますます進んで、12月12日には橋木城を占領して、翌13日には更に海城を占領した。

ところが、この海城は四通八達の要地で、交通上、作戦上、非常に重要なところでしたから、けなげにも敵はこれを回復しようと、例の宋慶が馬玉崑らと共に13,000の大軍を率いて、海城の西南に当る紅瓦寨に現れた。 わが軍は直ちにこれを偵知して、同月19日、進んでその攻撃に着手したが、たまたまこの日は大雪が降った上に、我れは地の利をも得なかったので、頗る進退の自由に便が無かったにもかかわらず、大いに奮戦猛鬪、ついにこの優勢の敵を破って紅瓦寨をも占領した。

### 第一 第二 両軍の連絡

一方、第二軍は旅順を占領した後、第一軍との連絡を謀ろうと企て、乃木少将は直ちに北上して普蘭店、復州を占領していたが、明治28年一月、蓋平の敵がまたもや海城を回復しようと計画しているのを知って、すなわち先んじてこれを攻撃しようと、その10日に急に兵を進めて蓋平に迫った。 午前5時半から攻撃をはじめ、めづらしくも敵の頑固な応戦を受けたが、ついに大いにこれを破って遠く敵を走らせ、午前9時40分に蓋平城を占領した。

第一、第二の両軍はここにはじめて連絡がついた。

### 敵の海軍の威海衛蟄伏

敵はしかし、この後も容易に海城を断念せず、幾度か大兵をもってその回復を企てたが、我が軍はいつもこれを撃退して多大の損害を彼れに与えた。

こうして、第一、第二の両軍の連絡がついて、遼東半島は殆ど全く我が有に帰したので、いよいよ兵を直隸の平野に入れて北京を衝こうという段取りになった。 しかし一方、敵の北洋水師は、黄海の戦に敗れて以来、深く根拠地の威海衛に蟄伏して徐に力を養い、旅順が落ちて以後は、一層その防備を厳にして、飽くまでここを死守する態度を執っていた。

敗残の艦隊とはいえ、敵の提督は名将の聞こえの高い丁汝昌であるし、これをそのままにしておいては、とても安んじて我が兵を初めからの上陸予定地である渤海湾頭の山海関に輸送することが出来ない。 依って大本营は命を大山第二軍司令官に下し、威海衛を背後から攻撃させて、連合艦隊と協力して敵の北洋水師を殲滅させることにした。

## 第10話 日清戦争

### 山東作戦軍の編成

そこで、山東作戦軍は新たに第二師団（師団長は陸軍中将 佐久間左馬太）と第六師団（師団長は陸軍中将 黒木為楨）の残部とで組織され、1月20日から山東半島の東端に近い榮城湾に順次上陸して、25日に全軍の上陸を終わった。この日、大山司令官は榮城県に入り、30日を期して威海衛を攻撃することとして、すなわち部署を定めて26日に全軍を出発させた。

### 威海衛の陸上砲台の占領

30日、第六師団は海上の我が艦隊と協力して、威海衛東口の百尺崖の諸砲台に攻撃を加え、第一に先づ摩天嶺砲台を占領したが、この時、惜しいかな、我が第十一旅団長 大寺安純少将は榴弾に中って戦死した。次いで、楊峰嶺、謝家所などの陸上砲台、趙北嘴、鹿角嘴、龍廟嘴などの海岸砲台を攻めて、激戦半日、ことごとくこれも占領した。

第二師団は背後を迂回して威海衛の本部の西南に迫って行ったが、逸早く百尺崖方面の諸砲台を陥れた第六師団が、やがてこれと相呼応して海岸近くを東南から進んで行くと、敵の守備兵は忽ち我が軍の威風に恐れて潰走した。

こうして2月2日には威海衛の陸上方面は悉く我が手に帰したが、日島、劉公島の諸砲台はなお頑強に抵抗して、劉公島の島蔭に隠れていた敵の艦隊もまたこれと力を協せて、さかんに我が占領した砲台を砲撃した。

### 降服を勧める

これより先き、伊東連合艦隊司令官は、敵の提督 丁汝昌とは予ねて親交の間柄で、よくその人物をも知っていたので、今や彼が敗残の艦隊をもって威海衛を死守し、いたづらに死を急いでいるらしいのを惜しんで、1月20日、丁寧、懇切を極めた降伏書を作り、その24日にこれを丁汝昌に送って降伏を勧めたのでした。しかし、丁汝昌は一死を以って国に報いようと固く決心をしていたので、これに返事をしなかった。

### 連合艦隊の威海衛攻撃

そこで、連合艦隊は山東作戦軍と協力して威海衛を攻撃したのですが、今や陸上の諸砲台が完全に我が手に落ちてしまうと、2月3日の夜から連夜ひそかに水雷艇を遣わして、先づ敵の敷設した防材の一部を破壊し、ついで港内深く潜んでいる敵艦を襲撃して、定遠、来遠、威遠などの諸艦を次々に爆破し、撃沈した。7日の早朝には全艦隊を挙げて敵軍を攻撃し、日島の砲台を沈黙させた上に、港の西口から脱出を企てた敵の水雷艇を追撃して、その10余隻の大部分を撃沈したり捕獲したりした。

### 丁汝昌の降服

9日にはまた、我が占領した陸上の砲台から放った砲弾が見事に敵艦靖遠に命中してこれを沈没させ、さらには11日には、敵が最後の恃みとしていた劉公島東端の砲台を破壊したので、さすがの丁汝昌も今

## 第10話 日清戦争

はこれまでと観念して、12日の朝、ついに書を伊東司令長官に送って降服を乞い、ただ将士其の他の生命を助けられんことをと望んで、自分は毒を仰いで自殺した。

伊東司令長官は深くその死を憐れみ、こと如く彼の請いを許して、敵の陸海軍人を放つ事とし、17日に、諸艦を率いて威海衛に入り、諸砲台および鎮遠、濟遠、平遠、広丙、鎮東、鎮南など、すべて10隻、約16,000屯の軍艦を我に収めた。清国の北洋水師はここに全く滅んで、北洋の制海権はいよいよ完全に我が手に帰した。

### 第一 第二 両軍の行動

一方、遼東半島の海城方面には、伊東司令長官が威海衛に入った日の前日、即ち2月16日にも、またもや敵の逆襲があったが、我が軍は忽ちこれを撃退したのみならず、ついで第二軍の第一師団は、秦平山に敵を破って、大石橋に進み、第一軍の第五師団は、3月2日に鞍山站を占領した。

そして翌々4日に第五師団と第三師団との主力は、10,000余の敵兵が防守している牛莊城を攻めて、午後11時にこれを占領し、その翌々6日には第二軍に属する第一師団の第一、第二旅団が共に榮口を攻めてこれを陥れた。敵の敗兵は、結氷している遼河を渡って、悉く田庄台に逃げ込んだ。

### 田庄台の戦

田庄台は遼河の右岸に位し、西のほう錦州を経て山海関に通じている要地であって、九連城以来、しきりに敗退をつづけて来た敵の総大将宋慶が、10,000余の兵をもって拠守していた。野津第一軍司令官は、第二軍が榮口を占領した後、すなわちこれと協力して敵に当たる方略を定め、3月9日、山地中将の第一師団を左翼隊として田庄台の西南に向わせ、桂中将の第三師団を中央隊として敵の正面に、奥中将の第五師団を右翼隊として敵の東北に向わせた。

折から、風雪の烈しい日でしたが、我が軍は猛烈な砲火を浴びせながら三方から並び進んで、午前10時頃、将にこれを包囲しようとする、敵兵は忽ち例によって潰走した。我が軍は一斉に進んで、これを焼き払って敵の本拠を覆えた。この日の戦いに、敵の死者は2,000を越え、傷者は無数であったが、我が軍の死者は僅かに16名、傷者も100名に達しなかった。鹵獲品も頗る多かった。

### 第二期の作戦

すでに北洋水師が全滅して、今また遼河以東の敵が一兵もいなくなると、我が軍の第一期の作戦はここに首尾よく終わったので、大本営では更に第二期の作戦に移ることとなり、3月17日、参謀総長小松宮彰仁親王を新たに征清大総督に任じて、近衛、第四の両師団を率いて金州半島に向わせる事にした。但し、宮の一行がいよいよ出発したのは、4月13日で、この時にはすでに清国の講和大使李鴻章が来朝していた。

## 第10話 日清戦争

### ほうこう せんりょう 澎湖島の占領

又、一方、連合艦隊の主力は、さきに威海衛を占領した後、大本営の命によって直ちに澎湖島の占領に向うこととなり、3月15日、陸軍歩兵大佐比志島義輝の率いる混成支隊を援護して長崎の佐世保軍港を出て、同20日に澎湖島に至り、23日に陸軍および海軍の陸戦隊を裏正角に上陸させた。翌24日には海陸相応じて敵の本拠である馬公城および同砲台を陥れ26日には澎湖島全部を占領した。それで、比志島大佐は澎湖守備隊長としてそこを守るようになった。

### しんこく わ こ 清国、和を請う

こうして開戦以来、清国軍は陸に海に連戦敗、今はもう手も足も出なかったのも、清国皇帝はついに直隷総督李鴻章を講和全権大使に任じて我が国に講和を求めた。

これより先き、旅順口が陥落した時、清国は天津の海関税務司ドイツ人デットリングなる者を我が国に遣わして、講和を求めた事があったが、デットリングは要するに清国政府の一個の雇人であるに止まり、且つ全権を委任されてもいなかったのも、我が政府は清国政府が国際上の儀礼を軽んじているのを憤って、これと商議するのを拒絶した。デットリングは空しく天津に帰った。

すると28年1月、清国は更に張蔭桓、邵友濂の二人を全権委員として我が国に派遣したが、これもまた講和の全権を委任されていなかったのも、我れは内閣総理大臣伊藤博文、外務大臣陸奥宗光を全権弁理大臣に任じて、談判を開始しようとしたのを忽ちに中止して、直ちに彼等兩人を帰国させた。

そこで、ついに第三回の講和使として、当時清国第一の政治家として聞こえていた李鴻章が任じられたのです。

### こうわしせつ りこうしょう そうなん きゅうせんじょうやく 講和使節 李鴻章の遭難、休戦条約

彼は3月14日に天津を発して、19日に談判地と定められた下関に着き、翌20日から我が全権弁理大臣伊藤博文、同陸奥宗光と其の地の春帆楼上に講和会議を開いた。

ところが、3月24日、第三回目の会見を終えて、李鴻章がその旅宿である引接寺に帰ろうとした途中、突然、一凶漢がかれを狙撃して傷つけたので、わが上下は愕然として驚いた。天皇は深く宸襟をなやまされ、特に勅使および軍医総監を派遣して慰問させられたが、更に、先きに李鴻章が望んで許されなかった休戦を、無条件で許す事にした。3月30日、彼我の全権は六か条の休戦条約を結んで21日間の休戦を約した。

凶漢は小山豊太郎といって、もと自由党の壮士でしたが、この際の講和は尚早いと考えたところから、李鴻章を殺して、談判を不調に終わらせようとしたということです。よく一知半解の徒が浅薄な独断から無謀な事を仕出かして、大事をあやまつたりするが、彼は正しくその一人でした。

勅命を受けて、軍医総監石黒忠憲、同佐藤進の兩人が広島から下関に急行した時、伊藤、陸奥の両全権は悄然として打ち沈んでいたが、口を揃えて、「とんだ事が出来て、実に困っている。一個師団や二個師団の兵が戦いに敗れたのとは訳が違ふ。戦敗は取り返しはつくが、この事は取り返しがつかな

## 第10話 日清戦争

い。何分とも治療の事をよろしく頼む」と言ったということです。

いかに我が全権が心を悩ましたかが察せられるし、又、その後の談判の気合にまで、この遭難に対する我れの遠慮が影響したであろうことも想像される。

### 講和条約の成立

しかし、幸いに、外科の大家であった佐藤総監の治療で、李鴻章の創は案外に早く平癒に向ったので、4月1日、新たに任命された清国の全権 李経方（李鴻章の子）との間に講和会議は再び開かれたが、同10日からは李鴻章も出席して、しきりに講和条件の軽減を求めたりして、ついに4月17日に至り、彼我全権の間に日清講和条約が成立した。世に言う下関条約がこれです。

### 下関条約の内容

この条約は11か条から成っていたが、その主要な条件は、

- (1) 清国は朝鮮国が完全無欠な独立国であることを確認し、
- (2) 遼東半島、即ち鴨緑江口から遡って安平河口に至り、同河口から鳳凰城、海城、榮港に亘り、遼河口に至る折線以南の地およびこれに付属する諸島嶼と、台湾全島およびこれに付属する諸島嶼と、澎湖列島とを日本に割譲し、
- (3) 軍費賠償金として庫平銀二億両（当時の我が約3億円）を日本に支払い、
- (4) 新たに貿易港として、沙市、重慶、蘇州、杭州の4港市を開き、且つ日本国汽船の揚子江航路を拡張すること

などでした。

天皇は、4月20日をもってこれを批准され、翌21日、講和に関する詔勅を下された。

こうして、開戦の原因となった朝鮮国の独立は茲に完全に確保されて、わが維新以来の宿題はめでたく解決されたのみならず、新たに遼東半島、台湾、および澎湖列島を領有する事となって、大陸にも、又、南方にも、我が国民が発展していく足がかりができたので、この条約文が一般に報じられた時は、国民は皆絶大の歓喜をもって平和の回復を祝したのです。

### 三国の干渉

ところが、講和の詔勅を拝して2日の後、即ち4月23日、突然、我が国に取って容易ならぬ一大事件が起こった。ロシア、フランス、ドイツの三国が、わが政府に対して、日本が遼東半島を領有するのは東洋永遠の平和に害があるので、よろしくこれを放棄して清国に還附されたい、と勧告して来たことです。名高い三国干渉がこれです。しかし、その顛末については、私は次に1話を設けて、別にこれを話そうと思います。

### 大本営のご座所における明治天皇

さて、天皇は講和条約を批准の後、大本営を京都に移して、4月27日に広島を発輦された。顧み

## 第10話 日清戦争

れば、前年の9月15日に着輦以来、約8ヶ月の間、狭いご座所の一間を寝室にも拝謁所にも充てられ、不自由を忍ばれながら、日夜万機を行われたのです。かたじけなくも出征軍人の辛苦を深く察しになり、宮内官が、せめて時々の休息の為にもとお勧めした安楽椅子をも、「出征者には安楽椅子はあるまい」と言われ、退けられ、又、折からの厳寒に、ストーブを備えられるようにと伺うと、「戦地に在る者の身を思ってみよ」と言われ、これも退けになり、僅かに小さな丸い手あぶりだけで過ごされたと承る。

### 我が軍の凱旋

又、征清大総督宮は、この時、旅順に在陣中でしたが、講和条約の批准交換が、5月8日に清国の芝罘で、わが全権伊東巳代治と清国の全権伍廷芳との間に無事に行われて、いよいよ日清両国の平和が茲に全く旧態に復したので、すなわちその18日に旅順を發して凱旋の途につかれ、同月22日に京都に帰着された。ついで陸軍も、台湾の征討に向った近衛師団と、暫く占領地の守備に当たることとなった第二、第四の両師団の外は、つぎつぎに凱旋した。海軍も凱旋した。

天皇は5月29日に京都を發たれ、翌30日に東京に還幸された。市民は万歳を連呼して天皇の凱旋を祝した。

( 第10話 日清戦争 終わり。 次は前頁に戻り、第11話 三国干渉と遼東還付 へ )